日本カトリック司教協議会聖書・教理部門　**聖書週間公開講演会**　大阪高松カテドラル **2026年11月23日**(月) 13:00-16:00［阿部講演は 14:40-15:55 (60分、15分)］

# ■「共同体で聖書を読む」

阿部仲麻呂 (日本カトリック神学院教授、日本カトリック司教協議会聖書・教理部門委員)

**講演の導入**

## Ⅰ．聖書はなぜ共同体で読むべきなのか

1. 聖書そのものが「共同体の書」であるから
2. 聖書は「教会の書」であるから
3. 個人の読みには限界があるから

## Ⅱ．歴史のなかで共同体はどのように聖書を読んできたのか

1. 初代教会：聖書は「朗読されるもの」
2. 修道院：聖書を中心とした共同生活
3. 中世：聖書は典礼のなかで読まれる
4. 近代以降：個人的な読書の広がりと共同体としての読書の再発見

## Ⅲ．共同体で聖書を読むことの霊的かつ教会的な意味

1. 神の言葉は共同体を創る
2. 聖書は共同体の一致を育てる
3. 聖書は共同体の歩みを照らす

## Ⅳ．現代の教会における具体的な実践方法

1. 霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）を共同体で行う
2. 主日の朗読箇所を分かち合う
3. 小教区・地区での聖書集会
4. 若者・家庭・高齢者向けの聖書読書会
5. 典礼のなかでの聖書の位置づけを深める

**講演の結び**　［＋感想意見 15 分］

## ■付録１．聖書を「共同体として読むこと」についての質疑応答集

① 個人で聖書を読むことと、共同体で読むことの違いは何ですか？

②共同体で聖書を読むとき、意見が対立したらどうすればよいですか？

③「霊的読書」（レクティオ・ディヴィナ）をグループで行うときの注意点はありますか？

④ 聖書を読むことに慣れていない信徒にも参加してもらうにはどうすればよいですか？

⑤ 共同体で聖書を読むと、誤った解釈が広まる危険はありませんか？

⑥ 若者や子ども向けに聖書を読むとき、どのような工夫が必要ですか？

⑦ 高齢者の多い共同体では、どのような聖書の読み方が適していますか？

⑧ 共同体で聖書を読むことは、教会の一致にどのように役立ちますか？

⑨ 聖書を読む会が「勉強会」になってしまうのですが、どう改善できますか？

⑩ 共同体で聖書を読むことは、宣教にも役立ちますか？

## ■付録２．青少年向けの質疑応答集

① 聖書って難しそうですが、若い人でも読めますか？

② 共同体で聖書を読むと、何がいいの？

③ 聖書を読んでも、正直よくわからない時がありますが、どうしたらいいですか？

④ どの部分から読めばいいのでしょうか？

⑤ 聖書を読むとき、質問してもいいのでしょうか？疑ってもいいのでしょうか？

⑥ 友達と聖書を読むとき、何を話せばいいのでしょうか？

⑦ 聖書を読むと、人生が変わるって本当なのですか？

⑧ 教会にあまり来ていない友達にも、聖書をすすめてもいいのでしょうか？

⑨ スマホで聖書を読んでもいいのでしょうか？

⑩ 聖書を読むとき、神が本当に語っているのはどのようにしてわかるのでしょうか？

## ■付録 3．司祭、修道者向けの質疑応答集

① 「聖書は教会の書である」という主張は、聖書の霊感とどのように関係しますか？

② 共同体で聖書を読むことは、教会の「聖伝（Traditio トラディティオ）」とどのように関係しますか？

③ 聖書学的な研究（歴史批評など）と共同体での霊的読書は、どのように統合できますか？

④ 共同体で聖書を読む際、教会の「マジステリウム（教導職）」はどのような役割を果たしますか？

⑤ 初代教会の「聖書朗読の共同体性」は、現代の小教区にどのように応用できますか？

⑥ 共同体で聖書を読むことは、教会の「識別（discernment ディサーンメント）」とどのように関係しますか？

⑦ 典礼のなかでの聖書朗読と、共同体での聖書集会とはどのように区別されますか？

⑧ 聖書を共同体で読むことは、エキュメニカルな対話にどのように寄与しますか？

⑨ 聖書を共同体で読む際、教父の解釈はどのように活用できますか？

⑩ 共同体で聖書を読むことは、宣教司牧（ミッション）にどのような影響を与えますか？

## ■付録 4．聖書学（歴史批評・正典形成・文体論）に関する質疑応答集

① 歴史批評は信仰を弱めるという懸念がありますが、共同体で聖書を読む際にどのように位置づけるべきでしょうか。

② 正典形成の過程を見ると、初代教会の共同体が重要な役割を果たしています。現代の共同体の聖書読書とどのように関連しますか。

③ 文体論（物語［ナラティブ］批評・構造主義など）は共同体での聖書読書にどのように役立ちますか。

④ 使徒言行録の歴史性について議論がありますが、共同体で読む際にはどのように扱うべきでしょうか。

⑤ 旧約の編集史（Deuteronomistic History, Priestly Source など）は共同体の聖書読書にどのように影響しますか。

⑥ 福音書の「二資料説」「四資料説」などの成立史は、共同体で読む際にどのように扱うべきですか。

⑦ 歴史批評と正典批判的な読書（canonical criticism）はどのように統合できますか。

⑧ 文学的ジャンル（詩篇、黙示文学、福音書、書簡など）は共同体読書にどのような影響を与えますか。

⑨ 歴史批評が強調する「著者の意図」と、霊的読書が強調する「神の意図」はどのように関係しますか。

⑩ 歴史批評が指摘する「編集意図（redaction）」は、共同体の霊的読書にどのように役立ちますか。

## ■付録 5．典礼神学・教父学にもとづく質疑応答集

① 典礼における聖書朗読は「神の言葉の現臨」と言われますが、教父たちはどのように理解していましたか。

② 典礼の中での聖書朗読と、教父たちの「霊的解釈（sensus spiritualis）」はどのように関係しますか。

③ 典礼暦（Advent、Lent、Easter など）は、共同体の聖書読書にどのような神学的枠組みを提供しますか。

④ 教父たちは旧約聖書をどのように共同体的に読んでいましたか。

⑤ 典礼の朗読配列（Ordo Lectionum Missae）は、教父的伝統をどのように継承していますか。

⑥ 教父たちの「聖書の霊的読書（lectio Divina）」は、現代の共同体読書にどのように応用できますか。

⑦ 典礼における「沈黙」は、教父的伝統においてどのような意味を持ちますか。

⑧ 教父たちは聖書を「共同体のアイデンティティ形成」のためにどのように用いましたか。

⑨ 典礼神学における「聖書の多層的意味」は、共同体読書にどのように応用できますか。

⑩ 教父たちの説教（homilia）は、共同体で聖書を読む際のモデルになりますか。

## ■付録 6．典礼の構造と聖書の関係（奉献文・聖務日課・秘跡神学）

### Ⅰ．典礼の構造と聖書：全体的原則

### Ⅱ．奉献文（Eucharistic Prayers）と聖書の関係

1. 奉献文の構造は聖書の構造を反映する

   ⑴感謝（Anamnesis）

   ⑵奉献（Oblatio）

   ⑶聖霊の祈願（Epiclesis）

   ⑷執り成し（Intercessio）

2. 奉献文は旧約と新約の統合

3. 奉献文は共同体の聖書読書の頂点

**Ⅲ．聖務日課（時課の典礼 Liturgy of the Hours）と聖書の関係**

1. 詩篇は聖務日課の中心
2. 聖務日課は「聖書の典礼的読書」
3. 聖務日課は共同体の霊的読書のモデル

**Ⅳ．秘跡神学と聖書の関係**

1. 洗礼：出エジプトとキリストの死と復活
2. 堅信：聖霊の降臨（使徒言行録）
3. 聖体：過越祭の成就
4. 和解：預言者の回心の神学
5. 病者の塗油：イエスのいやしのわざ

**Ⅴ．まとめ：典礼は「聖書の生きた場」である**

## ■付録 7．聖書と教理の関係――教会の信仰がどのように形成され、伝えられてきたか

**Ⅰ．基本原則：聖書と教理は対立しない**

**Ⅱ．聖書 → 教理：教理は聖書から生まれる**

1. 初代教会：聖書のメッセージを「信仰告白」にまとめる
2. 公会議：聖書の教えを体系化する
3. 教理は聖書の「正しい読み方」を守るために生まれた

**Ⅲ．教理 → 聖書：教理は聖書を読むための「鍵」になる**

1. 三位一体の神の教理があるから、聖書の神理解が統一される
2. キリスト論の教理があるから、福音書のイエス像がぶれない
3. 教理は「聖書の読み方のガイドライン」

**Ⅳ．聖書と教理の相互作用：教会の信仰は「循環」している**

1. 聖書が教理を生み、教理が聖書を深く読む助けとなる

2. 教理は聖書の「共同体的読み」を保証する

3. 教理は聖書の「誤読」を防ぐ

**Ⅴ．具体例：聖書と教理の関係がよくわかるテーマ**

1. 三位一体の神

2. キリストの二性一人格

3. 教会論

4. 秘跡神学

**Ⅵ．まとめ：聖書と教理は「教会の信仰を支える二つの側面」である**

---

**講演の導入**

皆様、本日は「共同体で聖書を読む」という主題でともに考える機会をいただき、心より感謝申し上げます。私たちキリスト者は、日々の祈りや黙想のなかで聖書を読みます。つまり、教会の歴史を振り返ると、聖書は常に「共同体のなかで」読まれ、理解され、分かち合われてきたことが明らかです。

聖書は「個人的な霊的読書」で終わるものではありません。むしろ**聖書は、共同体のなかでこそ、その本来の力を発揮します。**これは初代教会から現代まで一貫する事実です。

本日の講演では、**「Ⅰ．聖書はなぜ共同体で読むべきなのか」、「Ⅱ．歴史のなかで共同体はどのように聖書を読んできたのか」、「Ⅲ．共同体で読むことの霊的かつ教会的な意味」、「Ⅳ．現代の教会における具体的な実践方法」**という、これら四つの柱を中心にしてお話しします。

**Ⅰ．聖書はなぜ共同体で読むべきなのか**

**1. 聖書そのものが「共同体の書」であるから**

聖書は、個人の霊的経験を記録した書物ではありません。むしろイスラエルの民、初代教会、使徒たち、という具合に、常に共同体の祈りと経験とが積み重なって形成された書

物です。その際、⑴旧約は「神の民の歴史」を描き、⑵新約は「キリストを中心とした共同体の誕生と宣教」を記録しています。つまり、聖書はもともと共同体のなかで生まれ、共同体のなかで一緒に読まれることを前提として編集されているのです。

### 2. 聖書は「教会の書」であるから

第二バチカン公会議『啓示憲章』は次のように述べています。「聖書の解釈のしかたに関するあらゆることがらは最終的には教会の判断のもとにあり、教会こそが神のことばを保ち解釈する権限と任務を神から受けて行使するからである」(『神の啓示に関する教義憲章』12項［註 26；第一バチカン公会議『カトリック信仰に関する教義憲章 Dei Filius』第 2 章参照］)。これは非常に重要な原則です。聖書は、それぞれの個人が勝手に解釈してよい書物ではなく、むしろ**教会共同体における信仰生活の立場で一緒に読むべき書物**なのです。

### 3. 個人の読みには限界があるから

個人で聖書を読むと、自分の経験や価値観や感情に引き寄せてしまいがちになります。しかし聖書を共同体で一緒に読むと、他者の視点、教会の伝統、典礼の流れ、共同体の祈りが加わり、聖書の意味がよりいっそう豊かに理解できるようになり、心が開かれます。

## Ⅱ．歴史のなかで共同体はどのように聖書を読んできたか

### 1. 初代教会：聖書は「朗読されるもの」

初代教会では、聖書は個人が所有するものではなく、共同体の集まりで朗読されるものでした。つまり「家庭教会での朗読」、「使徒の手紙の回覧」、「共同体での解釈と分かち合い」が積み重ねられました。聖書の内容は共同体の場で朗読されることで、「一緒に聞くもの」であり、「一緒に受け取るもの」でした。

### 2. 修道院：聖書を中心とした共同生活

4 世紀から今日に至るまでのあらゆる修道院では、聖書朗読は共同体の中心的な営みです。「共同体での聖務日課」、「霊的読書（レクティオ・ディヴィナ)」、「共同体での黙想と分かち合い」が深められました。修道者たちは、聖書を通して共同体の一致を深め、神のことばを意識して受け容れて愛の実践を積み重ねて生きる生活を築きました。

### 3. 中世：聖書は典礼のなかで読まれる

特に修道生活の伝統を大切にした中世の教会では、聖書は典礼のなかで体系的に読まれ

ました。ミサと聖務日課は、共同体が聖書朗読を聞いて人生の指針を受け取る場でした。

### 4. 近代以降：個人的な読書の広がりと共同体としての読書の再発見

近世 16 世紀の活版印刷技術の発展により、個人で聖書を読むことが可能になりました。しかも各国語で聖書が翻訳されたので、近代 17 世紀ごろから各自が聖書を手にして個人的な読書をすることが広がりました。特にルターによるドイツ語訳聖書が大量に印刷されて庶民層にも安い値段で幅広く流通しました。しかし、第二バチカン公会議以降、教会は「共同体で聖書を読む」ことの重要性を再び強調しています。

## Ⅲ. 共同体で聖書を読むことの霊的かつ教会的な意味

### 1. 神のことばは共同体を形づくる

聖書は共同体を生み、共同体を養い、共同体を導きます。こうして、「イスラエルの民は『神のことば（モーセ五書)』によって形成された」のであり、「初代教会は『使徒の教え（使徒言行録)』によって一致した」のであり、「現代の教会も『神のことば』によって歩む」のです。共同体で聖書を読むことは、教会の自分たちらしさ（アイデンティティ）を確認する行為です。

### 2. 聖書は共同体の一致を育てる

共同体で聖書を読むと、たがいの信仰経験が共有され、理解が深まり、共同体の絆が強まります。「同じ言葉を聞き」、「同じ祈りを捧げ」、「同じ希望をいだくことになる」からです。聖書は共同体の一致の源なのです。

### 3. 聖書は共同体の歩みを照らす

共同体は常に課題や困難を抱えています。そのとき、聖書は共同体の歩みを照らし、方向性を示します。「使徒言行録は『共同体の危機』をどのようにして乗り越えたかを示し」、「預言者たちの呼びかけは『共同体の罪』を指摘するとともに回心へと導き」、「福音書は『共同体の中心がキリストである』ことを教えるのです。共同体で聖書を読むことは、共同体の未来を識別（discern）する営みです。

## Ⅳ. 現代の教会における具体的な実践方法

ここからは、現代の教会で実際に取り組むことができる方法を具体的に示します。

**1. 霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）を共同体で行う**

霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）は、**「(1)読む（Lectio）」、「(2)黙想する（Meditatio）」、「(3)祈る（Oratio）」、「(4)観想する（Contemplatio）」**という四つのステップで神のことばを味わう方法です。共同体で行うと、おたがいが気づいたことが共有され、神のことばがより豊かに響きます。

**2. 主日の朗読箇所を分かち合う**

主日の朗読箇所を中心に**「(1)感じたこと」、「(2)気づいたこと」、「(3)心に響いた言葉」、「(4)共同体としての課題との関連」**を分かち合うことは、共同体の信仰を深める非常に良い方法です。

**3. 小教区・地区での聖書集会**

小教区の中で、少人数のグループが定期的に集まり、聖書を共同体で読むことは、共同体の活性化に大きく寄与します。

**4. 若者・家庭・高齢者向けの聖書読書会**

共同体の多様性に応じた読書会を設けることで、聖書を共同体で読むことの実りがより広く受け取られるようになります。

**5. 典礼のなかでの聖書の位置づけを深める**

ミサの朗読は、共同体が神のことばを受け取る最も重要な場です。**「(1)朗読奉仕者の養成」、「(2)朗読の質の向上」、「(3)沈黙の時間の確保」**などが大切です。

**講演の結び**

聖書は、私たち一人ひとりに語りかけると同時に、共同体全体にも語りかけています。共同体で聖書を読むことは、教会の伝統に根ざし、現代の教会においても不可欠な営みです。**神のことばは「(1)共同体を形づくり」、「(2)共同体を一致へ導き」、「(3)共同体の歩みを照らし」、「(4)共同体を未来へ送り出す」もの**です。こうして、私たちが共同体で聖書を読むとき、教会は本来の姿を取り戻し、神のことばによって生きる共同体となります。

今日の講演が、皆さまの共同体における聖書の読み方を深める一助となれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

## ■付録 1. 聖書を「共同体として読むこと」についての質疑応答集

### ① 個人で聖書を読むことと、共同体で読むことの違いは何ですか？

**回答：** 個人で聖書を読むことは、神との一対一の対話として非常に大切です。しかし共同体で聖書を読むと、**「⑴他者の視点」が加わり、「⑵教会の伝統」のなかでともに生きることができるようになり、「⑶典礼の流れ」を自覚し、さらに「⑷共同体の経験」が加わるので、聖書の意味がより豊かに開かれて深まります。**聖書はもともと共同体のなかで生まれ、共同体に向けて書かれた書物です。そのため、共同体で読むと「本来の響き」を取り戻せるようになります。

### ② 共同体で聖書を読むとき、意見が対立したらどうすればよいですか？

**回答：** 対立はむしろ健全なプロセスです。聖書は一つの答えだけを示すのではなく、共同体が対話しながら「識別」することを促します。大切なのは、**「⑴相手の意見を否定しない」、「⑵自分の経験だけに閉じこもらない」、「⑶教会の教えと伝統を基準にする」、「⑷祈りの心を保つ」**という努力です。共同体で聖書を読む目的は、**神のことばが共同体に何を求めているのかを仲間といっしょに協力して探るため**です。

### ③「霊的読書」（レクティオ・ディヴィナ）をグループで行うときの注意点はありますか？

**回答：** あります。特に以下の点が重要です。**「⑴黙想の時間を十分に取ること」、「⑵分かち合いが『説教』にならないようにすること」、「⑶個人の経験を強制しないこと」、「⑷沈黙を恐れないこと」、「⑸司祭や指導者が結論を急がせないこと」。**レクティオ・ディヴィナは「答えを出す場」ではなく、**神のことばが心に響く瞬間を共同体で共有する場**です。

### ④ 聖書を読むことに慣れていない信徒にも参加してもらうにはどうすればよいですか？

**回答：** ハードルを下げる工夫が有効です。たとえば、**「⑴短い箇所から始める」、「⑵質問を一つだけに絞る」、「⑶『感じたこと』を中心にして分かち合う」、「⑷知識よりも『心に響いた言葉』を大切にする」、「⑸典礼の朗読箇所を使う（親しみやすい）」**ことが大事です。何よりも「聖書を知らないと参加できない」という雰囲気をなくすことが大切です。聖書は知的な教科書ではなく、**神が語りかける愛のことば**だからです。

**⑤ 共同体で聖書を読むと、誤った解釈が広まる危険はありませんか？**

**回答：** 確かに危険はあります。しかし、教会はそのために「解釈の基準」を与えています。**「⑴教会の教え（カテキズム）」、「⑵典礼の流れ」、「⑶教父たちの解釈」、「⑷司祭や指導者の役割」**。共同体で読むときは、これらの基準を踏まえることで、誤解を防ぎつつ、豊かな読みが可能になります。

**⑥ 若者や子ども向けに聖書を読むとき、どのような工夫が必要ですか？**

**回答：** 若者や子どもは「物語」・「経験」・「感情」に強く反応します。それゆえ、**「⑴物語性のある箇所を選ぶ」、「⑵具体的な場面を想像させる」、「⑶グループワークを取り入れる」、「⑷質問を単純にする」、「⑸『自分だったらどう感じる？』と問いかける」**工夫が必要となります。聖書は若者にとっても非常に魅力的な書物です。それゆえ、彼らが「自分の物語」として受け取れるように導くことが鍵です。

**⑦ 高齢者の多い共同体では、どのような聖書の読み方が適していますか？**

**回答：** 高齢者は人生経験が豊かで、聖書の言葉が深く響きます。それゆえ、**「⑴長い沈黙を大切にする」、「⑵ゆっくり朗読する」、「⑶思い出や人生経験を分かち合う」、「⑷慰めと希望の言葉を中心にする」、「⑸詩篇や福音書を多く使う」**ことが大事です。高齢者の信仰経験は共同体の宝です。聖書を共同体で読むことを通して年長者の智慧が参加者全員に共有されます。

**⑧ 共同体で聖書を読むことは、教会の一致にどのように役立ちますか？**

**回答：** 共同体で聖書を読むと、**「⑴同じ言葉を聞き」、「⑵同じ祈りを捧げ」、「⑶同じ希望をいだき」、「⑷同じキリストを中心に据える」**という経験が生まれます。これは一致の基盤です。一致は「意見の一致」ではなく、**キリストの呼びかけをともに聞くことによって生まれる霊的な連帯**です。

**⑨ 聖書を読む会が「勉強会」になってしまうのですが、どう改善できますか？**

**回答：** 「知識中心」から「経験中心」へ移行することがポイントです。それゆえ、**「⑴**

**解説を短くする」、「⑵分かち合いの時間を増やす」、「⑶『心に響いた言葉』を最初に聞く」、「⑷祈りで始め、祈りで終える」、「⑸沈黙を取り入れる」**ことが大事です。聖書は学問の対象ではなく、**神が語りかける生きた愛のことば**です。その経験を中心に据えることで、勉強会から祈りの場へと変わります。

**⑩ 共同体で聖書を読むことは、宣教にも役立ちますか？**

**回答：** 大いに役立ちます。共同体が聖書を通して生き生きとした信仰を育むと、**「⑴言葉の一致」、「⑵祈りの一致」、「⑶方向性の一致」**が生まれ、共同体全体が**「福音をあかしする場」**となるからです。宣教は「型にはまった計画案（プログラム）」などではなく、むしろ**「共同体の生命力から自然に生まれるもの」**です。聖書はその生命力の源です。

## ■付録 2. 青少年向け質疑応答集

**① 聖書って難しそうですが、若い人でも読めますか？**

**回答：** もちろん読めます。聖書は「難しい本」ではなく、**人の心に語りかける物語**です。聖書には「⑴友情」、「⑵裏切り」、「⑶勇気」、「⑷不安」、「⑸希望」、「⑹家族」、「⑺夢」、「⑻挫折」が描かれるからです。若者が感じることは、聖書のなかに全部含まれていますのでヒントになります。むしろ若い時期こそ聖書の言葉が強く響くことが多いです。

**② 共同体で聖書を読むと、何がいいの？**

**回答：** 一番の善さは、**自分だけでは気づけないことに気づけること**です。たとえば、**「⑴他の人の感じたこと」、「⑵違う視点」、「⑶経験の共有」、「⑷励まし」、「⑸新しい発見」**などが私たちの心を、開かれた交流的な寛大さへと成長させます。聖書は「独りで読む本」ではなく、**みんなで読むともっと面白くなる本**です。

**③ 聖書を読んでも、正直よくわからない時がありますが、どうしたらいいですか？**

**回答：** わからなくて大丈夫です。聖書は「わからないところがあって当たり前」の本です。大切なのは、次のことです。**「⑴わからないままでも読んでみる」、「⑵心に残った言葉を大切にする」、「⑶みんなで話してみる」、「⑷祈りながら読む」**。理解しようとするより

も、まず**心に響く瞬間**を大切にしてください。そして、経験を重ねると急に意味がわかるときが訪れます。考えつづけて味わうことそのものが心を鍛え上げることになります。

**④ どの部分から読めばいいのでしょうか？**

**回答：** 若い人におすすめなのは、次の箇所です。

**⑴福音書（マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ）** → イエスの生き方がわかります

**⑵詩篇** → 感情がそのまま祈りになっています

**⑶使徒言行録** → 若い弟子たちが世界に飛び出す冒険物語が魅力的です

**⑷創世記の物語部分** → 家族・夢・失敗・希望が詰まっています

まず、「読みやすいところから読み始める」のが一番大事なことです。

**⑤ 聖書を読むとき、質問してもいいのでしょうか？疑ってもいいのでしょうか？**

**回答：** もちろんです。質問や疑問は、**信仰の成長のスタートライン**です。聖書の人物たちも、**「⑴迷い」、「⑵疑い」、「⑶不安」、「⑷神への質問」**をたくさん積み重ねています。質問することは、神から遠ざかることではなく、**神に近づくための大切なステップ**です。

**⑥ 友達と聖書を読むとき、何を話せばいいのでしょうか？**

**回答：** 難しいことを話す必要はありません。次の三つだけで十分です。**「⑴心に残った言葉」、「⑵気になったこと」、「⑶自分の生活とのつながり」。**「正しい答え」を探す必要はありません。**感じたことをそのまま話すだけで、聖書の理解は深くなります。**

**⑦ 聖書を読むと、人生が変わるって本当なのですか？**

**回答：** 本当です。でも「劇的に変わる」というより、**少しずつ、静かに、確実に変わる**ことが多いです。たとえば以下の学びが実現できます。**「⑴自分を大切にできる」、「⑵他人を尊重できる」、「⑶迷ったときに道が見える」、「⑷希望を失わなくなる」、「⑸自分の価値に気づく」**。聖書は、人生の「羅針盤（コンパス）」になります。

**⑧ 教会にあまり来ていない友達にも、聖書をすすめてもいいのでしょうか？**

**回答：** すすめても大丈夫です。ただし、押しつけないことが大切です。「この言葉、なんか良かったよ」、「この話、ちょっと面白いよ」、「一緒に読んでみない？」という気楽な呼びかけをつづけることが大事です。聖書は、信者だけの本ではありません。**あらゆる人に開かれた愛の呼びかけ**です。

**⑨ スマホで聖書を読んでもいいのでしょうか？**

**回答：** もちろん OK です。若い人にとってスマホは自然なツールです。大切なのは、**どこで読むかではなく、どう受け取るか**です。アプリで読んでも、紙で読んでも、神のことばは同じように心に届きます。

**⑩ 聖書を読むとき、神が本当に語っているのはどのようにしてわかるのでしょうか？**

**回答：** 「心が動く瞬間」がそのサインです。**「(1)なぜか気になる言葉」、「(2)何度も思い出す言葉」、「(3)背中を押されるような感覚」、「(4)慰められる瞬間」、「(5)何かが変わる予感」**。それらのしるしによって、神があなたに語っている可能性が見えてきます。神の声は、**大きな音ではなく、静かな響きとして届く**ことが多いです。

## ■3. 司祭、修道者向けの質疑応答集

**① 「聖書は教会の書である」という主張は、聖書の霊感とどのように関係しますか？**

**回答：** 聖書の霊感（Inspiratio）は、神が人間の著者を通して語られたという事実を示します。しかし教会は神の霊感を受けた書物を「自らの信仰にもとづいて」受け取り、典礼・教義・生活のなかで解釈しました。第二バチカン公会議『啓示憲章』12 項は、**「(1)聖書は教会にゆだねられた」**ものであり、**「(2)教会の生きた伝統のなかで解釈される」**と明言します。つまり霊感は「神のことばが教会に託された」という事実を示しており、**教会性（Ecclesialitas）は、その言葉が正しく理解される場を保証する**という関係にあります。霊感は神のことばの起源を、教会性は解釈の場を示すものとして理解することができます。

**② 共同体で聖書を読むことは、教会の「聖伝（Traditio）」とどのように関係しますか？**

**回答：** **聖伝は、「⑴使徒たちの宣教」、「⑵初代教会の信仰告白」、「⑶典礼の実践」、「⑷教父たちの解釈」、「⑸教会の継続的な信仰生活」を通して受け継がれてきた「生きた伝統」です。**共同体で聖書を読むことは、**聖伝の流れのなかで神のことばを再び受け取る行為**です。聖書は聖伝の中心にあり、聖伝は聖書の正しい読み方を保証します。共同体で読むことは、聖伝のなかで聖書を「生きた言葉」として受け取る最も基本的な営みです。

**③ 聖書学的な研究（歴史批評など）と共同体での霊的読書は、どのように統合できますか？**

**回答：** 両者は対立するものではなく、たがいに補完し合います。**「⑴聖書学的研究」**は、①著者の意図、②文脈、③歴史的背景、④文学的構造を明らかにし、テクストの「客観的意味」を探ります。一方、**「⑵霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）」**は、①神が今の共同体に何を語るか、②霊的な響き、③祈りのなかでの受け取り、を重視します。

教会は「⑴聖書学的研究」と「⑵霊的読書」の両者を統合するために、**「文字どおりの意味（sensus litteralis）」を基礎としつつも「霊的な意味（sensus spiritualis）」へと開かれる**という聖書の読み方の伝統的な枠組みを保持しています。こうして、歴史批評は聖書を読むための「土台」であり、霊的読書は「建物」と言えるでしょう。

**④ 共同体で聖書を読む際、教会の「教導職（マジステリウム）」はどのような役割を果たしますか？**

**回答：** 教導職は、**「⑴聖書の正しい解釈を保証し」、「⑵誤った解釈から共同体を守り」、「⑶信仰の一致を保つ役割を担います」**。共同体で聖書を読む際に、**「⑴カテキズム」、「⑵公会議文書」、「⑶教皇文書」、「⑷典礼の構造」**が、解釈のための「基準点」となります。教導職は、共同体での聖書の読書を制限するのではなく、むしろ**共同体が神のことばを豊かに受け取るための「安全な枠組み」を提供する**役割を果たします。

**⑤ 初代教会の「聖書朗読の共同体性」は、現代の小教区にどのように応用できますか？**

**回答：** 初代教会では、聖書は「朗読されるもの」であり、共同体が「朗読を聞く」ことでメッセージが心のなかに受け取られました。現代の小教区でも以下の形で応用できます。**「⑴主日の朗読を中心にした分かち合い」、「⑵家庭での小さな朗読会」、「⑶地区ごとの**

**聖書の集い」、「⑷朗読奉仕者の養成」、「⑸朗読後の沈黙の導入」、「⑹聖務日課の共同唱和」**。初代教会の原則は、**「聖書は共同体のなかで響く言葉である」**という点にあります。現代でも、朗読を中心とした共同体的な聖書の受容は非常に有効です。

**⑥ 共同体で聖書を読むことは、教会の「識別（discernment）」とどのように関係しますか？**

**回答：** 識別は、**「⑴神の導き」、「⑵共同体の課題」、「⑶霊の動き」**を見極める営みです。共同体で聖書を読むと、**「⑴神の言葉が共同体の現状に光を当て」、「⑵方向性を示し」。「⑶課題を明らかにし」、「⑷回心へと導きます」**。たとえば使徒言行録は、共同体が危機のなかで「聖書と祈り」を通して識別した例を多数示しています。共同体で聖書を読むことは、**識別の霊的プロセスの中心的要素**であると言えます。

**⑦ 典礼のなかでの聖書朗読と、共同体での聖書集会とはどのように区別されますか？**

**回答：** 典礼のなかでの聖書朗読は、**「⑴教会の公的祈り」、「⑵神のことばへの『奉仕』」、「⑶共同体への宣言」であり、聖書の内容が「教会の声」として響く場**です。

一方、聖書の集いは、**「⑴共同体の学び」、「⑵分かち合い」、「⑶霊的成長」**を目的とし、聖書の内容が「共同体の生活のなかで」受け取られる場です。それゆえ、典礼は「宣言」であり、聖書集会は「受容」であると言えます。両者はたがいに補い合い、共同体の信仰を深めます。

**⑧ 聖書を共同体で読むことは、エキュメニカルな対話にどのように寄与しますか？**

**回答：** 聖書はすべてのキリスト者に共通する基盤です。共同体で聖書を読むことは、以下の点でエキュメニカルな（諸教会一致推進的な）対話を促進します。次のとおりです。**「⑴共通のテクストを共有する」、「⑵同じキリストを中心に据える」、「⑶祈りを通して一致を経験する」、「⑷解釈の違いを対話的に理解する」**。教会は、聖書を中心とした対話が一致への道であることを繰り返し強調しています。共同体で聖書を読むことは、**一致の霊的基盤を育てる行為**です。

**⑨ 聖書を共同体で読む際、教父の解釈はどのように活用できますか？**

**回答：** 教父（古代の聖なる司教たち）の解釈は、**「⑴初代教会の信仰」、「⑵典礼の実践」、「⑶霊的読書」**の伝統を反映しており、共同体で聖書を読む際の重要な資源です。

今日、教父の解釈を活用する方法としては、**「⑴説教の準備」、「⑵聖書集会の補助資料」、「⑶霊的読書の深まり」、「⑷典礼の理解」**などが挙げられます。教父の解釈は、現代の共同体が先人たちとの結びつきを意識して「教会の連続性」を保ちながら聖書を読むための架け橋となります。

**⑩ 共同体で聖書を読むことは、宣教司牧（ミッション）にどのような影響を与えますか？**

**回答：** 共同体が聖書を通して活き活きとした信仰を育むと、**「⑴言葉の一致」、「⑵祈りの一致」、「⑶方向性の一致」**が生まれ、共同体全体が「福音をあかしする場」となります。宣教は机の上で作成される理論的なプログラムではなく、むしろ**神のことばによって形づくられた共同体の生命力からおのずと生まれるもの**です。聖書は宣教の源泉であり、共同体で聖書を読むことは宣教の基盤を整える営みです。

## ■付録 4. 聖書学（歴史批評・正典形成・文体論）に関する質疑応答集

**① 歴史批評は信仰を弱めるという懸念がありますが、共同体で聖書を読む際にどのように位置づけるべきでしょうか。**

**回答：** 歴史批評は「信仰の敵」ではなく、**聖書本文の地盤を固めるための学問的道具**です。歴史批評は以下のことがらを明らかにします。**「⑴著者の歴史的状況」、「⑵文書の成立過程」、「⑶文学的ジャンル」、「⑷共同体の課題」、「⑸編集意図（redaction）」**。これらは、聖書の「文字どおりの意味（sensus litteralis）」を確定するために不可欠です。

教会は歴史批評を拒絶したことは一度もありません。むしろ教皇ピオ 12 世の『ディヴィノ・アフランテ・スピリトゥ（Divino Afflante Spiritu 神の霊の吹きかけによる）』（1943 年）以来、歴史批評を積極的に受け容れました。共同体で聖書を読む際には、**歴史批評＝信仰の基礎を固めるための「土台」**として位置づけ、その上に霊的読書という建物を築くことが望ましいです。

**② 聖書正典の形成の過程を見ると、初代教会の共同体が重要な役割を果たしています。**

**現代の共同体の聖書の霊的読書とどのように関連しますか。**

**回答：** 聖書正典の形成は、**「⑴使徒的起源」、「⑵共同体での広範な使用」、「⑶教義との一致」、「⑷典礼での受容」**という基準によって進展しました。つまり、聖書は「共同体のなかで読まれ、祈られ、信じられた」結果として正典（正統な基準）となったのです。現代の共同体が聖書を読むことは、**聖書正典の形成の原初的ダイナミズムを再び生きる行為**と言えます。共同体で聖書を読むことは、**「⑴聖書正典の成立を支えた『受容の場』を再現し」、「⑵聖書が『生きた言葉』として機能する場を作り」、「⑶教会の連続性を経験することにつながり」**ます。

**③ 文体論（物語［ナラティブ］批評・構造主義など）は共同体での聖書読書にどのように役立ちますか。**

**回答：** 文体論はテクストを「物語（ナラティブ）として読む」ための方法であり、共同体での読書に非常に適しています。その際、**「⑴登場人物の動機」、「⑵物語の構造」、「⑶視点の変化」、「⑷語り手の意図」、「⑸象徴的表現」、「⑹反復構造」**が重要となります。これらを分析することで、共同体は聖書の物語を「自分たちの物語」として受け取ることができます。特に福音書は、**共同体の信仰告白を物語として表現した文書**であるため、文体論は共同体での読書との相性が良いです。

**④ 使徒言行録の歴史性について議論がありますが、共同体で読む際にはどのように扱うべきでしょうか。**

**回答：** 使徒言行録は、**「⑴歴史的記述」、「⑵神学的解釈」、「⑶共同体形成の証言」**が複合的に重なって成立した文書です。歴史批評は、「⑴ルカの資料」、「⑵編集意図」、「⑶神学的構造」を明らかにしますが、共同体で読む際には以下のことがらが重要です。**使徒言行録は「初代共同体がどのように神の導きを識別したか」を示す書物です。**歴史性の議論は重要ですが、共同体での読書では、**「⑴危機の乗り越え方」、「⑵宣教のダイナミズム」、「⑶共同体の一致」、「⑷聖霊の働き」**を中心にして使徒言行録読むことが望まれます。

**⑤ 旧約の編集史（Deuteronomistic History、Priestly Source など）は共同体の聖書読書にどのように影響しますか。**

**回答：** 編集史は、旧約が「長い共同体の経験のなかで形成された」ことを示します。た

とえば、**「⑴申命記史家は、亡国の危機のなかで歴史を再解釈した」、「⑵祭司資料は、共同体のアイデンティティを保持するために体系化された」、「⑶預言者の言葉は、共同体の回心を促すために編集された」**のです。つまり、旧約は「共同体の神学的反省の産物」です。現代の共同体が聖書を読む際に、**編集史の方法論は「共同体が神のことばをどのように受け取り、再解釈し、伝えたか」を理解するための助けとなります。**共同体としての読書は、旧約の形成過程と深く響き合います。

**⑥ 福音書の「二資料説」や「四資料説」などの成立史は、共同体で読む際にどのように扱うべきですか。**

**回答：** 資料説は、「⑴マルコの優先性」、「⑵Q 資料の存在可能性」、「⑶マタイおよびルカの編集意図を説明するための学問的モデル」です。共同体で読む際には、資料説を「学問的背景」として理解しつつ、以下を強調することが重要です。**福音書は、共同体がキリストの経験を伝えるために編纂した信仰告白です。**

資料説は、**「⑴共同体の課題」、「⑵宣教の状況」、「⑶神学的強調点」**を理解する助けとなります。しかし、共同体としての読書では、**「⑴キリストの姿」、「⑵弟子たちの応答」、「⑶神の国の宣言」**を中心に読むことが望まれます。

**⑦ 歴史批評と正典批判的な読書（canonical criticism）はどのように統合できますか。**

**回答：** 歴史批評は「テクストの起源」を探り、正典批判的な読書は「正典としての最終形態」を読む方法です。両者は対立するものではなく、以下のように統合できます。**「⑴歴史批評：テクストの形成過程を理解するのに役立つ」、「⑵正典（カノン）を重視する読書：教会が受け取った最終形態を読む」**。共同体で聖書を読む際には、**「歴史批評＝背景」、「正典（カノン）を重視する読書＝現在の信仰の場」**として両者を用いることができます。

**⑧ 文学的ジャンル（詩篇、黙示文学、福音書、書簡など）は共同体読書にどのような影響を与えますか。**

**回答：** ジャンル（genre［分類、種類］）の理解は、共同体が聖書を「誤解なく」読むために不可欠です。**「⑴詩篇：祈りとして読む」、「⑵黙示文学：象徴として読む」、「⑶福音書：信仰告白として読む」、「⑷書簡：共同体への指導として読む」**。ジャンルを理解すること

で、共同体はテクストを「その本来の意図」に沿って受け取ることができます。

**⑨ 歴史批評が強調する「著者の意図」と、霊的読書が強調する「神の意図」はどのように関係しますか。**

**回答：** 教会は、聖書には**「(1)人間の著者の意図（intentio auctoris）」、「(2)神の意図（intentio Dei）」**の両方が存在すると理解します。歴史批評は前者を、霊的読書は後者を探ります。両者は決して対立するものではなく、むしろ**神は人間の言葉を通して語られる**という霊感の原則によって統合されます。共同体での読書では、**「(1)歴史批評を用いて『地盤』を固め」、「(2)霊的読書で『建物』を築く」**という形で両者を統合できます。

**⑩ 歴史批評が指摘する「編集意図（redaction）」は、共同体の霊的読書にどのように役立ちますか。**

**回答：** 編集意図は、**「(1)著者が何を強調したか」、「(2)どのような共同体に向けて書いたか」、「(3)どのような課題に応答したか」**を示します。これは、共同体が聖書を読む際に非常に役立ちます。たとえば、**「(1)マタイは『律法の成就』を強調し」ており、「(2)ルカは『貧しい人への福音』を強調し」、「(3)ヨハネは『キリストの神性（神としての性質）』を強調し」**ています。編集意図を理解することで、共同体は**「この言葉は、私たちの共同体に何を求めているか」**をより深く識別できるようになります。

## ■付録 5．典礼神学・教父学にもとづく質疑応答集

**① 典礼における聖書朗読は「神のことばの現臨」と言われますが、教父たちはどのように理解していましたか。**

**回答：** 教父たちは、典礼で朗読される聖書を「キリストの現臨（praesentia Christi）」として理解しました。**「(1)オリゲネス：『聖書朗読は、キリストが共同体に語りかける瞬間である』」。「(2)アンブロシウス：『朗読者の声を通して、神のことばが教会に響く』」。「(3)アウグスティヌス：『福音が朗読されるとき、主は再び語られる』」。**教父たちは、聖書朗読を「単なる情報伝達」ではなく、**キリストが共同体に現臨し、語りかける聖なる行為**として理解していました。この理解は現代の典礼神学（『典礼憲章』）にも受け継がれています。

**② 典礼の中での聖書朗読と、教父たちの「霊的解釈（sensus spiritualis）」はどのように関係しますか。**

**回答：** 教父たちは、典礼で読まれる聖書を「霊的意味」へと開く鍵として理解しました。**「⑴文字どおりの意味（sensus litteralis）」、「⑵霊的な意味（sensus spiritualis）」、「⑶象徴的意味（allegoria）」、「⑷道徳的意味（tropologia）」、「⑸終末的意味（anagogia）」**。典礼は、これらの霊的意味を共同体が自然に受け取る場でした。典礼の構造（祭日、季節、朗読配列）は、**教父的霊的解釈を共同体の生活の中に組み込む装置**として機能しています。

**③ 典礼暦（Advent 待降節、Lent 四旬節、Easter 復活節など）は、共同体の聖書読書にどのような神学的枠組みを提供しますか。**

**回答：** 典礼暦は、共同体が聖書を「キリストの秘義（Mysterium Christi）」のなかで読むための枠組みです。**「⑴待降節：預言の成就、希望の神学」、「⑵四旬節：回心、荒れ野、試練」、「⑶復活節：新しい創造、聖霊の働き」、「⑷年間：キリストの教えと共同体の成長」**。典礼暦は、教父たちが強調した**「聖書はキリストの秘義を中心に読むべきである」**という原則を、教会の生活のなかで体系化したものです。共同体で聖書を読む際、典礼暦は「神学的なコンテクスト（文脈）」を提供します。

**④ 教父たちは旧約聖書をどのように共同体的に読んでいましたか。**

**回答：** 教父たちは旧約を「キリストの予型（typos）」として読みました。**「⑴アダム→新しいアダム（キリスト）」、「⑵ノアの箱舟→教会」、「⑶モーセ→キリストの予型」、「⑷出エジプト→洗礼の象徴」、「⑸過越祭→キリストの死と復活」。**これらは単なる象徴解釈ではなく、むしろ**共同体が旧約をキリストの光のなかで読むための神学的な枠組み**でした。共同体で聖書を読む際に、教父による予型論は旧約と新約との連続性を深める助けとなります。

**⑤ 典礼の朗読配列（Ordo Lectionum Missae）は、教父的伝統をどのように継承していますか。**

**回答：** 朗読配列は、教父たちの「聖書をキリスト中心に読む」伝統を体系化しています。**「⑴主日の三年周期は、キリストの生涯を共同体が繰り返し体験するための構造」**であり、**「⑵旧約朗読は、福音の予型として配置」**されており、**「⑶詩篇は、教会の祈りとして**

**応答すること」**であり、**「⑷書簡は、共同体への教えとして位置づけられ」**ます。これらは、教父たちが行っていた**「聖書を典礼のなかでキリストを中心として読む」**という方法を現代において再現したものです。

**⑥ 教父たちの「聖書の霊的読書（lectio divina）」は、現代の共同体読書にどのように応用できますか。**

**回答：** 教父たちの霊的読書は、以下の特徴を備えています。**「⑴聖書は祈りのなかで読むもの」、「⑵共同体の生活と結びつけて読むもの」、「⑶キリストの秘義を中心に読むもの」、「⑷典礼と連続して読むもの」。**現代における共同体としての読書では、**「⑴典礼の朗読箇所を用いる」、「⑵祈りで始め、祈りで終える」、「⑶キリスト中心の解釈を保つ」、「⑷共同体の課題と照らし合わせること」**で、教父の霊的読書を再現することができます。

**⑦ 典礼における「沈黙」は、教父的伝統においてどのような意味を持ちますか。**

**回答：** 教父たちは沈黙を「神のことばを受け取る場」として理解しました。**「⑴オリゲネス：沈黙は『言葉が魂に沈殿する時間』である」、「⑵カッパドキア教父：沈黙は『聖霊が語る場』である」、「⑶アウグスティヌス：沈黙は『心の耳を開く行為』である」。**典礼の沈黙は、**朗読された神のことばが共同体の心に浸透するための霊的空間**です。共同体で聖書を読む際にも、沈黙は不可欠です。

**⑧ 教父たちは聖書を「共同体のアイデンティティ形成」のためにどのように用いましたか。**

**回答：** 教父たちは、聖書を共同体の自己理解の中心に置きました。**「⑴教会は新しいイスラエルである」、「⑵洗礼は出エジプトである」、「⑶教会はキリストのからだである」、「⑷共同体は神の家族である」。**これらは、すべて聖書に基づく共同体の自己理解です。

現代の共同体が聖書を読むとき、**教父による共同体的な理解の仕方を再発見することが、共同体の一致と使命を深めるための鍵となります。**

**⑨ 典礼神学における「聖書の多層的な意味」は、共同体での読書の際にどのように応用できますか。**

**回答：** 典礼神学は、聖書を以下の多層的な意味で理解します。**「⑴歴史的意味：出来事の記述」、「⑵典礼的意味：教会の祈りの中での意味」、「⑶霊的意味：共同体の生活への適用」、「⑷キリスト論的意味：キリストの秘義との関係」**。共同体で聖書を読む際には、**典礼的意味と霊的意味を中心に読むことが、共同体の信仰を深める最も効果的な方法です。**

**⑩ 教父たちの説教（homilia）は、共同体で聖書を読む際のモデルになりますか。**

**回答：** 大いにモデルになります。教父の説教は、**「⑴典礼の朗読箇所に基づき」、「⑵共同体の現状に応答し」、「⑶キリスト中心の解釈を行い」、「⑷霊的成長を促し」、「⑸共同体の一致を育てる」**という構造を持っています。これは、現代の共同体読書の理想的モデルです。教父による説教は、**共同体が聖書を「生きた言葉」として受け取るための最も優れた伝統的方法**と言えます。

## ■付録 6. 典礼の構造と聖書の関係（奉献文・聖務日課・秘跡神学）

### Ⅰ. 典礼の構造と聖書：全体的な原則

典礼は、単に「聖書を読む場」ではなく、**聖書が共同体の祈りとして現臨する場**です。

第二バチカン公会議『典礼憲章』は、「典礼の中で神はご自分の言葉をもって民に語られる」と述べ、聖書朗読を「神の現臨の形態」と位置づけます。

典礼の構造は、**「聖書の物語（救いの歴史）」、「キリストの秘義（過越秘義＝パスカ）」、「共同体の祈り（教会の応答）」**を統合するように設計されています。この構造は、奉献文・聖務日課・秘跡神学のすべてに貫かれています。

### Ⅱ. 奉献文（Eucharistic Prayers）と聖書の関係

奉献文は、聖書の神学を凝縮した「救いの歴史の祈り」です。教父たちは奉献文を「聖書の神学的総合」と呼びました。

#### 1. 奉献文の構造は聖書の構造を反映する

典型的な奉献文は以下の流れを備えています。**「⑴感謝（Anamnesis）；①創造、契約、預言、キリストのわざ、②旧約から新約までの救いの歴史の要約」、「⑵奉献（Oblatio）；①キリストの死と復活の記念、②過越の神学（Exodus → Pascha）」、「⑶聖霊の祈願（Epiclesis）；①**

**聖霊の働きによる変容、②使徒言行録の共同体神学を反映している」、「⑷執り成し（Intercessio）；①教会、世界、死者のための祈り、②パウロ書簡の共同体理解を継承している」**。奉献文は、聖書の神学を「祈りの形」に再構成したものです。

### 2. 奉献文は旧約と新約を統合する

「⑴創造→創世記」、「⑵契約→出エジプト記」、「⑶預言→イザヤ・エレミヤ」、「⑷成就→福音書」、「⑸共同体→使徒言行録」、「⑹キリストのからだ→パウロ書簡」。奉献文は、聖書全体を「キリストの過越秘義（パスカ）」を中心に再読する典礼的解釈です。

### 3. 奉献文は共同体の聖書読書の頂点

共同体は奉献文を通して、**聖書の物語を自らの物語として祈る**ことになります。

## Ⅲ．聖務日課（時課の典礼 Liturgy of the Hours）と聖書の関係

聖務日課は、教会が一日を通して聖書を祈るための構造です。教父たちは聖務日課を「聖書の呼吸」と呼びました。

### 1. 詩篇は聖務日課の中心である

詩篇は「イスラエルの祈り」であるとともに「キリストの祈り」でもあり、さらに「教会の祈り」を統合する書物です。教父たちは「詩篇は教会の心臓である」と述べました。共同体が詩篇を唱えるとき、**キリストの祈りを自らの祈りとして唱える**ことになります。

### 2. 聖務日課は「聖書の典礼的読書」となる

聖務日課には以下のものが含まれます。「詩篇」、「旧約朗読」、「新約朗読」、「教父の講話」、「祈願」(Intercessions)。これは、聖書を「祈りのなかで読む」ための構造です。

### 3. 聖務日課は共同体の霊的読書のモデルである

霊的読書（レクティオ・ディヴィナ）の四段階（①Lectio, ②Meditatio, ③Oratio, ④Contemplatio）は、聖務日課の構造と深く響き合います。共同体で聖書を読む際、聖務日課は最も古く、最も確かなモデルとなります。

## Ⅳ. 秘跡神学と聖書の関係

秘跡は「聖書の神学が可視化されたもの」です。教父たちは秘跡を「聖書の象徴の成就」と理解しました。

### 1. 洗礼：出エジプトとキリストの死と復活

洗礼は多様な意味を思い出させる象徴的な儀式です。「水→創造」、「洪水→新しい創造」、「出エジプト→解放」、「ヨルダン川→新しい民」、「キリストの死と復活→新しいいのち」が連想されます。洗礼は、旧約の象徴がキリストにおいて成就した秘跡なのです。

### 2. 堅信：聖霊の降臨（使徒言行録）

堅信は、「五旬祭」、「使徒たちの派遣」、「新しい共同体の誕生」を秘跡的に再現します。

### 3. 聖体：過越祭の成就

聖体は、「マナ」、「過越祭」、「預言者の食卓の象徴」、「最後の晩餐」、「十字架と復活」を統合する秘跡です。聖体は、聖書の中心テーマである**「神が民を養う」**という動機を成就させるものです。

### 4. 和解：預言者の回心の神学

和解の秘跡は、「預言者の回心の呼びかけ」を思い出させ、「イエスによるゆるしの宣言」を実感させ、「初代教会の共同体における和解の実践」を秘跡として具体化します。

### 5. 病者の塗油：イエスのいやしのわざ

病者の塗油は、「イエスのいやし」、「使徒たちによるいやしの奉仕」、「共同体の連帯」を秘跡として表現します。

## Ⅴ. まとめ：典礼は「聖書の生きた場」となる

典礼は、聖書を「読む場」、「祈る場」、「経験する場」、「成就する場」として機能します。奉献文は「聖書の神学的総合」であり、聖務日課は「聖書にもとづく祈り」を実現させ、秘跡は「聖書の象徴の成就」をもたらします。共同体で聖書を読む営みは、典礼のなかで最も深く、最も豊かに生きています。

## ■付録 7. 聖書と教理の関係――教会の信仰がどのように形成され、伝えられてきたか

### Ⅰ. 基本原則：聖書と教理は対立しない

教会は、**「⑴聖書（神のことば）」と「⑵教理（教会の信仰の表現）」**とを「二つの別の源」ではなく、**一つの啓示の流れのなかにあるもの**として理解します。第二バチカン公会議『啓示憲章』はこう述べます。「聖書と聖伝は、同じ源から流れ出る一つの聖なる伝達である」。つまり、**聖書は啓示の基盤、教理はその正しい理解の表現**という関係にあります。

### Ⅱ. 聖書 → 教理：教理は聖書から生まれる

教理は、聖書の内容を**「⑴整理し」、「⑵深め」、「⑶誤解から守り」、「⑷共同体に伝える」**ために形成されました。

#### 1. 初代教会：聖書のメッセージを「信仰告白」にまとめる

例：⑴「イエスは主である」（ローマ 10・9）。⑵「キリストは死に、復活し、再び来られる」。これらの短い信仰告白が、後の教理の基礎となりました。

#### 2. 公会議：聖書の教えを体系化する

ニカイア公会議（325 年）やカルケドン公会議（451 年）は、聖書のキリスト論を整理し、「⑴真の神であり真の人」、「⑵三位一体の神」などの教理を明確化しました。

#### 3. 教理は聖書の「正しい読み方」を守るために生まれた

異端（アレイオス派など）が誤った聖書解釈を広めたとき、教会は教理を整えることで、**聖書の本来の意味を守った**のです。

### Ⅲ. 教理 → 聖書：教理は聖書を読むための「鍵」になる

教理は、聖書を読むときの「方向性」を示します。

#### 1. 三位一体の神の教理があるから、聖書の神理解が統一される

旧約の神＝新約の父、御子イエス、聖霊、これらが決してバラバラではなく、**一つの神の働きとして理解できるようになるのも教理のおかげです。**

#### 2. キリスト論の教理があるから、福音書のイエス像がぶれない

福音書に描かれたイエスは「⑴ただの預言者ではない」ばかりか、「⑵ただの偉人でもない」のであり、「⑶真の神であり真の人」です。この枠組みがあることで、聖書に描かれているイエス像を正しく読めるようになります。

**3. 教理は「聖書の読み方のガイドライン」**

教理は聖書の上に立つものではなく、**聖書を誤解なく読むための教会の知恵**です。

## Ⅳ. 聖書と教理の相互作用：教会の信仰は「循環」している

「聖書→教理→聖書→教理→」という循環が、教会の歴史のなかで続いています。

**1. 聖書が教理を生み、教理が聖書を深く読む助けとなる**

例：聖書における「父と子と聖霊」 → 三位一体の神の教理

三位一体の神の教理 → 聖書の神理解が深まる

**2. 教理は聖書の「共同体的読み」を保証する**

個人の勝手な解釈ではなく、**教会全体の信仰のなかで読む**ことを可能にする。

**3. 教理は聖書の「誤読」を防ぐ**

歴史上、誤った解釈は常に存在しました。教理はその誤読から共同体を守る役割を果たします。

## Ⅴ. 具体例：聖書と教理の関係がよくわかるテーマ

**1. 三位一体の神**

⑴聖書：父・子・聖霊の働き

⑵教理：三位一体の神として統合 → 聖書の神理解が一貫する

**2. キリストの二性一人格**

⑴聖書：イエスは人として苦しみ、神として奇跡を行う

⑵教理：真の神・真の人 → 福音書のイエス像がぶれない

**3. 教会論**

⑴聖書：キリストのからだ、ぶどうの木、神の民

⑵教理：教会は「キリストのからだ」である → 教会の一致と使命が明確になる

**4. 秘跡神学**

⑴聖書：パンとぶどう酒、洗礼、いやし

⑵教理：秘跡として体系化 → 典礼の意味が深まる

## VI. まとめ：聖書と教理は「教会の信仰を支える二つの側面」である

**「⑴聖書は神のことばそのものである」。「⑵教理は神のことばを正しく理解し、守り、伝えるための教会の智慧である」。**――両者は決して対立するものではなく、むしろ**教会の信仰を支える両輪**です。聖書が「源泉」であり、教理が「方向性」を正します。聖書が「内容」であり、教理が「解釈の枠組み」を提供します。聖書が「神のことば」を伝え、教理が「神のことばの正しい理解」をもたらします。この関係を理解すると、共同体で聖書を読む営みが、教会の信仰の流れのなかでどれほど豊かな意味を持つのかが見えてきます。

---

**主要参考文献**

René Latourelle, Rino Fisichella, *Dizionario di Teologia Fondamentale*, Cittadella Editrice, Assisi, 1990.

René Latourelle, Rino Fisichella, *Dictionary of Fundamental Theology*, The Crossroad Publishing Company, New York, 2000.

Gerald O'Collins, *Rethinking Fundamental Theology; Toward a New Fundamental Theology*, Oxford University Press, New York, 2011.

---

2026 年 10 月 23 日（金）記